昭和十五年全國麥作付段別及豫想收穫高調

農林省の調査になる昭和十五年北海道麥作付段別及豫想收穫高は昭和十五年七月二十三日付官報を以て發表されたが、之を前回發表の三府四十三縣の分と合算せる全國通計は次の如くである。

昭和十五年全國麥作付段別及豫想收穫高

	作付段別	豫想收穫高	前年作付段別に比し	同上割合	前年實收高に比し	同上割合	前五箇年平均實收高に比し	同上割合
	町段	石	町段		石		石	
大麥	三四四、六二五・三	七、〇一三、〇四〇	△九、二七五・五	△ 〇・〇三六	△七五二、〇二九	△ 〇・〇九七	八九、六三八	〇・〇一三
裸麥	四〇九、五八四・六	六、一四〇、八三〇	△ 七四・九	△ 〇・〇〇〇	△五八九、七三三	△ 〇・〇八八	八八、九一五	〇・〇一五
小麥	八四二、〇八四・三	一三、一五七、四四〇	九六、四八二・七	〇・一二九	四三、五七四	〇・〇〇四	二、二一七、七一四	〇・一三三

（備考）麥豫想收穫高の調査時期は北海道は七月一日現在、東北六縣、新潟及長野は六月十日現在、茨城以下三府三十五縣は五月二十日現在の三回とす

大阪市社會部の同市貸家狀況調査

事變下の大工業都市大阪の住宅問題は人口問題上も忽諸にし難い問題の一つだが、昭和五年以降最近十年間の同市の人口、世帶數、住宅數等の集計は次の如くで住宅難の現狀を如實に物語つてゐる。

	人口	世帶數	住宅數	空家數	世帶數百に對する住宅數	住宅數百に對する空家數
昭和五年	二、四五三、五七三	五四一、〇三三	五〇九、八七四	二六、九六三	九四・二四	五・二九
〃 六年	二、五一九、五〇〇	五五六、二〇〇	五一七、一六二	三〇、六五一	九二・九八	五・九三
〃 七年	二、五八六、三〇〇	五七一、一〇〇	五二九、六三七	二八、六五五	九二・七四	五・四一
〃 八年	二、六五四、〇〇〇	五八五、六〇〇	五四二、〇六二	二八、〇八八	九二・五七	五・一八
〃 九年	二、七二二、七〇〇	六〇二、六〇〇	五五一、八八七	二三、九四六	九一・五八	四・三四
〃 十年	二、九八九、八七四	六三〇、二三二	五六三、三五八	一九、五二三	八九・三九	三・四七
〃 十一年	三、一〇一、九〇〇	六五三、九〇〇	五八二、二八九	一八、九八六	八九・〇五	三・二六
〃 十二年	三、二一三、〇〇〇	六七七、八〇〇	五九八、三四一	一八、六七八	八八・二八	三・一二
〃 十三年	三、三二一、二〇〇	七〇〇、一〇〇	六一〇、五九九	一八、八〇二	八七・二一	三・〇八
〃 十四年	三、三九四、二〇〇	七一五、五〇〇	六二二、四四六	六、七四三	八六・九九	一・〇八

（備考）一、人口及世帶數は毎年十月一日現在、住宅數及空家數は毎年十二月末日現在
二、本表は大阪市統計書に依る

なほ同市社會部が同市内所在の延坪三十五坪未滿の木造貸家六、七五〇戸（各區より普通住宅三〇〇戸、店舗住宅又は作業場住宅一五〇戸づゝ）を選び昭和十五年一月一日現在を以て實施せる貸家調査は大阪市社會部報告第二五一號「本市に於ける貸家の狀況」として發表されたが、之によると右調査貸家の一戸當平均敷地面積一一・四三坪、空地面積一・五九坪、空地の敷地に對する割合一三・九一％、型式は四戸建のもの最も多く、一戸當平均建坪は平家建六・九七坪、二階建一〇・五〇坪、室數平家建二・三〇室、二階建四・二五室、疊數一六・二六疊、家賃は二四・五八圓で延坪當一・六六圓疊一疊當一・五一圓となつてをり、昨昭和十四年十月十八日の地代家賃統制令の公布以前に於ける家賃の變動狀況を見るに、昭和十四年九月一日現在の家賃を前年昭和十三年八月四日當時と比較せる結果は値上げせるもの三九件、値下げせるもの一九件、また同法公布後の昭和十四年十一月一日現在を同年九月一日當時と比較せる結果は値上げせるもの五件、値下げせるもの一一件（その内統制令により舊に復せるもの七件）となつてゐる。

なほ右調査貸家の家主一、九四四人の内貸家新築の意志を有せざるもの一、八六三人が其の理由として擧ぐる所を百分比を以て示せば次の如くである。

建築材料入手困難の爲	二〇・〇八
敷地無き爲	五・〇五
資金不足の爲	一七・五五
採算取れざる爲	六・三九
材料高き爲	二六・五二
家賃統制の爲	二・〇四

建築統制の爲	〇・二一
時節柄見合せる	二・九五
管理困難の爲	一・五六
業務の都合に依り	一・〇四
家事の都合により	三・九七
別に理由なし	六・四九
其の他	〇・二一
不詳	五・五八

一九三九年ソ聯邦の國勢調査

ソ聯邦國家計畫委員會國民經濟中央統計局が政府の決定により一九三九年一月十七日現在を以て施行せる全聯邦國勢調査(極北部の數區を除く)の結果は之を既往一九二六年十二月十七日現在の調査結果と對比して社會主義下の人口動態の研究資料として興味深いものであるが、その主要數字を示せば以下の如く、十二年間の人口增加大約二千三百五十萬、一五・九%年平均一・二三%、約七百萬に及ぶ女子人口の超過(一九二六年には女子四百九十萬の超過)、都市人口の總數に對する比率の壓倒的發展等注目に値ひする種々の事實を見せてゐる。(外務省調査部篇「ソ聯邦人口調査資料(一)」參照)

一九三九年男女別人口

(並に一九二六年=一〇〇とする指數)

	男	女	計
一九三九年一月十七日現在	八二、六六四、九八一	八八、八〇三、二〇五	一七〇、四六七、一八六
一九二六年二月十七日現在	七二、〇四三、三五二	七五、九八四、五六三	一四七、〇二七、九一五
一九二六年=一〇〇とする指數	二五・〇	二六・九	二五・九

都市及農村別人口

(括弧內は全人口に對する百分比)

	都市人口	農村人口
一九三九年一月十七日現在	五五、九〇九、九〇八(三二・八%)	二四、五五七、二七八(六七・二%)
一九二六年二月十七日現在	二六、三二四、二四(一七・九%)	二〇、七二三、八〇二(八二・一%)
一九二六年=一〇〇とする指數	二二・五	九四・九

主要都市人口(番號は人口數順位)

	都市名	一九三九年	一九二六年=一〇〇とする指數
(1)	モスクワ	四、一三七、〇一八	二〇三・九
(2)	レニングラード	三、九二、三四〇	一八八・八
(3)	キエフ	八四六、二九三	一六四・八
(4)	ハリコフ	八三三、四三二	一九九・七
(5)	バクー	八〇九、三四七	一七八・五
(6)	ゴリキー	六四四、一一六	二八九・七
(7)	オデッサ	六〇四、三三三	一四三・六
(30)	イルクーツク	二四三、三八〇	三三・一
(37)	ウラヂウオストック	二〇六、四三二	一九・三
(40)	ハバロフスク	一九九、三六四	三八三・一
(49)	ニコラエフ	一六七、一〇八	一五九・三
(80)	チタ	一〇三、五五五	一五六・七
(129)	コムソモリスク	七〇、七四六	—
(155)	ブラゴエーシチェンスク	五八、七六一	—

尙、右一九三九年國勢調査結果に關し同年六月二日プラウダ紙所載エヌ・ウオズネセンスキーの所說の大意を揭ぐれば次の如くである。

本調査は現在人口と現住人口との兩方に亙つて行はれたが、現住人口數の現在人口數に對する差違が僅かに〇・〇六%に過ぎないことは其の統計的正確さを物語るに足るものである。

一九二六年末より一九三九年初頭に亙るソ聯邦の增加速度一五・九%は、同期間の歐洲諸國、米國及び日本の人口增加速度一〇・四%に對し一倍半の數値を示してゐる。

その理由はこの間ソ聯邦は强大工業國となり兼ねて又社會主義的大農業國となつたからで、一九三八年の國民所得(一〇五〇億留)は一九二六年の四・八倍に增大してをり、この間に於ける國民の社會的構成上の變化も亦著しい。ソヴィエト社會が尙ほ社會主義的社會となるに到らなかつたと考へられる一九二八年の社會的構成を一九三七年の其れと對照すると次の如くで、

	一九二八年	一九三七年
勞働者及勤務者	一七・三%	三四・七%
コルホーズ農民(組合化せる手工業者を含む)	二・九	五五・三
自作農民及組合化せる手工業者	七二・七	五・六
資本主義的分子(ネップマン及富農)	四・五	—
其他の住民(學生、軍人、年金生活者)	二・四	四・二

尙、この間の總人口の增加比率は一六%、國民所得に於ては三八〇%の增である。

また一九三八年ソ聯邦の工業總生產高(一〇六〇億留)は一九二六年の六・七倍であり、金屬加工工業は(一九三九年三二四・六億留)は同期間中二一・七倍に增大してゐる。都市人口の增加(一九二六年一七・九%、一九三九年三二・八%)は之に基くもので、工業、建設、